

私はフリーの書籍編集者で、鈴木邦男著の書籍は5冊、作ってきた。2002年2月、イラク戦争の始まる1カ月前に、一水会が募集したバグダッド訪問団に誘われ、そのデリゲーションのメンバーとして、ナマ鈴木邦男に初めて出会った。その後、本を作る過程で、少しずつ少しずつ距離が縮まり、ここ10年間は一番接触している編集者だったと思う。

椎野 礼仁 ● 編集者



畑中純氏を偲ぶ展覧会にて。椎野(左)と鈴木(2017年9月12日)

師・鈴木邦男に捧ぐ

来る者は拒まず 誰からも親しまれた 右や左を超越した言論人

民族派団体「一水会」を創設し左右の垣根を取り払った論客

私は1949年生まれ。団塊の世代の一番下の年齢層であり、大学ではご多分に漏れず(と僕らの世代は言えるのである)新左翼の運動にかかわった。そんな私と、新右翼の鈴木邦男とは、なぜか(少なくともこちらの感じ方では)馬が合った。というより、去る者は追わず来る者は拒まない鈴木邦男の幅広イズムに、まんまと絡めとられた一人だったのかもしれない。

残念なことに病を得て、鈴木邦男はここ3年程、外部との交流は不可能となった。私もまた、気をもみながら、傍観せざるを得なかった。だからこの稿で、私は何を伝えられるのか、よくわからないまま、何か書きたいという気持ちのままに、場をいただいた香村編集長に感謝しながら書き進めることにする。

鈴木邦男の職業は何ぞや

この人のことを、どういう呼称で呼び、どういう肩書を付せばいいのか、迷ってしまう。寺山修司の掣に倣うなら、この人の職業欄には「鈴木邦男」と書くのが最もふさわしいと思う。

今年の1月27日、昼食を終えてのんびりしていた時、クニオガールズ

(後述)のA子から電話があった。「邦男さんが亡くなったの」、声はすぐ涙声となった。

1月27日午後2時過ぎ、一水会のツイッターが以下のようにつぶやいた。

一水会顧問・鈴木邦男は、令和5年1月11日午前11時25分、療養先の病院にて79歳で逝去しました。葬儀は親族で執り行われ、訃報はご親族を通じて、1月26日にお知らせ頂きました。ここに生前のご厚誼に深謝いたします。ご親族へのご香典、ご供花等は一切ご遠慮願います。問合せ先は一水会03-3364-2015

ここ数年、鈴木さん(ここは普段呼んでいた「さん」付けにしたいと思う)は原因不明の転倒を皮切りに体調を崩し、自宅で療養を続けていた。詳細はわからないが、パーキンソン病が疑われる症状で、実際、薬も処方されていたという。

私はここ10年くらい、クニオボーイズの一人として、鈴木さんと行動を共にすることが多く、またその聲咳に接するうち、すっかりこの人物のとりこになった。鈴木さんも、私



秋元ヒロさんを挟んで左が椎野、右が鈴木(2017年7月8日)

やクニオボーイズ・クニオガールズには心を許し、実際、いろんな面で頼りにされていたと思う。パソコンをやらないオンタイ(などと僕は時々鈴木さんをこう呼んだ。御大である)のために、原稿用の資料の検索・プリントアウトから、出版社や雑誌社との打ち合わせの同席、講演やイベント参加への送り迎え、そして地方へ出かけるときのチケットの手配と現地への同行まで、ガールズ・ボーイズは、まるで私設秘書のように、いや職業的な秘書でもそこまですべきでないであろうことまで、かいがいしく世話をした。

左右を超越した言論人

そういうことを自然にさせてしまう人であり、改めて口に出しての感謝など、本人もしないし、僕らも誰一人として求めなかった。

1月27日、訃報が世間に伝わった後、僕らもびつくりするような量で、各界から様々な方の悼みの記事、SNSでの書き込みがあふれた。

朝日新聞の「天声人語」では、1月29日の全幅を使って、鈴木さんについて書いた。鈴木邦男の何たるかを、鈴木さんの三島由紀夫への思いの変化をたどりながら紹介し、末尾をこう結んだ。

「右や左といった思想の枠に収まらない異色の言論人が逝った」

世間的な肩書は、例えばその死亡を伝える新聞記事やネット配信では以下のようになっている。

○毎日新聞「討論番組への出演などで右派の論客として知られ、民族派団体「一水会」を創設した作家の鈴木邦男さん

○朝日新聞「新右翼団体「一水会」の創始者で、作家・評論家の鈴木邦男さん

○東京新聞「民族派団体「一水会」の元代表で、イデオロギーを超えた

言論活動を展開した評論家の鈴木邦男さん

○読売新聞「「一水会」元代表・鈴木邦男氏が死去、79歳」「対米自立」掲げた右派の論客

メディアの付した肩書は、新右翼団体「一水会」の創始者で元顧問あたりが共通で、それは確かに事実だ。おもしろいのは、鈴木さんの原稿や談話が載ったことのない産経新聞が、平成20年10月17日付の産経新聞大阪本社版の連載記事「さらば革命的世代」の中での鈴木さんの言葉から取って、「鈴木邦男さんが夢想した「右翼版全共闘」という見出しを付けていることだ。同じように鈴木さん

には依頼がなかった読売新聞が「対米自立」掲げた右派の論客」という見出しを立てている。自紙の購読者にはあまり鈴木邦男に馴染みがないという判断でもあったのだろうか。

鈴木さんと親交のあった著名人が発表している文章やSNSでは、天声人語のように「右と左という立場を超越した人」という人物評が多かった。例えば、格差・貧困問題に取り組むアクティビストであり、著作も多い雨宮処凛さんは、Webサイト「マガジン9」で持っている連載「雨宮処凛がゆく!」の624回(2

月1日)にこう書いた。晩年はその言動から「左翼」と言われることも多かった。とにかく日本の右翼・左翼の垣根を取っ払い、分断と対立を乗り越える象徴みたいな人だった。

そんな鈴木さんは、私にとってものすごく特別な人だ。なぜなら、私の人生は鈴木さんと出会ったことで大きく変わったからだ。だいぶおかしな方向に。

そして鈴木さんとの面白可笑しいエピソードを連ねながら、自らの人生遍歴についても明らかにしているので、ぜひ原文にあたってみることをお勧めしたい。

朝日新聞編集委員の藤生明さんも、鈴木さんを高く評価する記事を、一水会の公式発表があったその日に掲載している。

そのタイトルは「鈴木邦男さんの突然の訃報でかみしめる「言論」への覚悟」、サブタイトルは「新右翼武闘派からテロの否定、そして言論の自由の擁護者へ」だ。

記事はヴォルテールの言葉として伝えられる(あなたが言っていることに、私はまるで同意しないが、それを言うあなたの権利のために体を張っても戦う)を鈴木さんがよく

筆にしたことに触れて、言論に対する鈴木さんの覚悟を紹介している。

東京新聞記者の望月衣塑子さんも、週刊朝日に寄せた「『愛国とは何かを』問いネット右翼の危うさ批判」という追悼文の中で、「愛国とは何か、人間とは何かを問い続けた鈴木邦男さんが亡くなった。思想や心情を超え、左右両派の言論人と交流する『現場』の人だった」と書く。

クニオガールズ・クニオボーイズ

さて、メディアの引用はこのくらいにして、個人的な付き合いの話題に戻らせていただく。冒頭に書いたクニオガールズ、クニオボーイズの話だ。

これは別に、そんな決まったグループがあったわけではない。ここ20年くらいの間に、鈴木邦男を慕い、陰に陽に、その活動の手助けをした人たちの謂いである。数人とも十人超とも数えられる。それぞれガールズ・ボーイズとしての活動歴（と言葉が適切かどうかは分からないが）はまちまちだし、濃淡もさまざまだ。

クニオガールズのうち二人は、鈴木さんのドキュメンタリー映画にもその名前で登場し、本名と素顔をさ

らしているもので、実名を披露していいのだが、なんとなくイニシャルにとどめておく。

そのうちの一人は鈴木さんが、へビコと呼んでかわいがった女性だ。なんと結婚式では、鈴木さんが花嫁の父の役を果たして、パーズンロードを腕を組んで歩いた。映画好きで、とりわけ若松孝二の映画をこよなく愛し、若松晩年の代表作「11・25 自決の日 三島由紀夫と若者たち」は20回以上見ているという。

前後は分からないが、鈴木さんと知り合ったのも、若松や三島由紀夫への関心から来たものだ。今は三島由紀夫研究家を名乗ってトークイベントに登壇することもある。

また2020年にハモニカブックスから出版された「彼女たちの好きな鈴木邦男」という書籍は、鈴木さんと9人の女性との対談や、6人の女性が書いた鈴木さんへの手紙で構成された本だが、その最後に「匿名座談会 『愛される邦男』って、ほんと？」が載っているが、その匿名の3人は、自ら任ずるクニオガールズで、鈴木さんが持てる理由などが語られている。曰く「クニオさんは色気はあるけどエロくない」のだそうだ。そして、多分ここ以外には活

字になつていないと思うのだが、若いころの女性関係の話がF子として出てくる。さすがクニオガールズ、情報収集には抜かりがない。

因みに、鈴木さんが対談しているのは望月衣塑子、三浦瑠璃、赤尾由美（赤尾敏の姪）等々、手紙を寄せているのはユン・スヨン（日韓友好フリーハグ運動）、御手洗志帆（現昭和 cultura アーカイブス代表理事）等々、見事に鈴木邦男の人脈の広さを表現している。

クニオボーイズは正確にはクニオオールドボーイズの方が適当かも知れない。その筆頭格は元公務員の寅猫氏だ。地方へ出張るときは、チケットや宿を全部手配し、鈴木さんの住むみやま荘まで迎えに行き、列車に乗り、会場に送り届け、帰りは逆コースをたどるといふ献身ぶりだった。

「紳士のたしなみ」で対応

鈴木さんのドキュメンタリー映画の話もしておこう。2020年2月に公開された「愛国者に気をつけるー鈴木邦男」という作品だ。監督は中村真夕。ニューヨーク大学大学院で映画を学んだ才媛で、劇映画やドキュメンタリーも手掛ける。

この人が、「鈴木邦男をちゃんと記録したものが無い」と気づき、2017年からカメラを携えて鈴木さんを追い始めた。ここで、個人的な話を一つ披露させていただくと、映画を見た方もあまり覚えていないようだが、ファーストシオンは中村監督が「みやま荘」のドアをノックするところから始まる。「みやま荘」とは鈴木さんがもう数十年住んでいるというほぼ六畳一間のアパート。風呂がついているだけましというアパートで、とても右翼の大物が住むような場所とは思えない。雨宮処凛さんは、結婚もせずに、アパートで何十年も活動を続けた、その清貧さが信用できると話す。

映画のファーストシオン。中村監督がアパートの扉をノックすると鈴木さんがドアを開け「あれ、レーニンさんは？」という。レーニンさんは、実は私のことだ。私の名前は礼仁と書いて「れいにん」と読む。本名だし、新潟県生まれの純粋な日本人だ。なぜ鈴木さんが開口一番、この問いを發したのか？ 中村監督は鈴木邦男を表すキーワードとしてみやま荘があるのを知り、その部屋でのインタビューを多用したいと鈴木さんに要請した。その時の鈴木さ



点で取り上げた「ザ・コープ」が横浜の映画館で上映されたとき、反日映画だとして上映に反対する「主催回復を目指す会」などの右翼団体が映画館前で街宣を繰り返した。

その時、映画館を背にして上映の妨害に対峙してい

た。不思議な人徳だった。
凄さを感じさせない凄さ

不思議な人徳という意味では、人にごさや庄を感じさせることの全くない人だった。だから、その逝去にあたって、多くの人が賞賛を寄せ、ほめているものを読むと、まったくその通りだなと、改めて鈴木邦男の偉大さを認識したりしたのだが、そばにいと、まったく普通のオジサンだった。

その典型的な例は、自分の本の奥付に住所と電話番号を明記することだった。確かに個人情報秘匿がまびかしい現在では考えられないことだが、それ以前から、昭和の時代から、奥付への住所・電話番号の記載は実行していたようだ。これこそ言論の覚悟を示すものだという賞賛が、この間、あふれた。でも本人に言わせると「だって昔の作家はみんな載せてたよ。漱石だって鷗外だって」ということになる。

でも、今にして思う。本当は覚悟がいったことだったのではないか。実際、その住所で訪ねてきた人も少なくなかったという。「今、〇〇の駅にいるんですが、今からお尋ねしてもよろしいでしょうか」という電

話がよくかかってきたと話していた。そういう時は、駅のそばにあるファミリーレストランで待ってもらおうとにしていたそうだ。

そんな時の会話はたいがいが人生相談のようなことが多かったようだ。中には「右翼になりたいんですけどどうしたらいいですか」というのもあったとか。

そんな鈴木さんだったが、パーキンソンやコロナ禍のなかで、半世紀住み慣れたみやま荘を引っ越すことになった。なにせ築60年にも及ぶというアパートでは、バリアフリーのバの字もなかった。寝起きのしやすいう大型ベッドも入れることになって、ついに引っ越しを余儀なくされた。

その時だ、鈴木さんは著書に住所を入れることを断念した。訪ねてこられても、対応できないからだ。ましてや2002年の赤報隊事件の時のように、アパートが放火されでもしたら、不自由な体では大ごとになりかねない。鈴木邦男にとっては、自らのアイデンティティにかかわる苦渋の決断だったことだろう。

それとも、泉下で鈴木さんは「またレーニンさんは大げさなことを書いて」なんて苦笑しているかもしれない。きっとそうだな。

んの答えが、「それはいいけど、レーニンさんが同席すること」という条件を付けた。それは昭和18年、戦中生まれの御仁の倫理観なのである。男性が一人で住む部屋に女性一人だけでは招じ入れない」ということだ。確かに鈴木さんより6歳年下の僕も、「女性が訪ねてきたときはドアは開けっ放ししておくのが紳士たるものの礼儀だ」という教えは受けたことがある。

なので、あのファーストシーンがあったのだ。その意味に気が付いた人がいたろうか。実はこの話をした時に、一人の女性だけが「その種のことだと思いました」と返事をした。

映画は、鈴木さんの「言論の覚悟」を物語る貴重なシーンも収録(提供を受けたもの)していた。それは、日本のイルカ漁について反捕鯨の視

た鈴木さんがツカツカと彼らの前に歩み寄って「お前たちのやってることはただの弱い者いじめじゃないか」「俺と討論しよう」としゃべりかけた。「邪魔するな!」「朝日新聞の太鼓持ちち帰れ!」などと右翼のマイクが怒号を浴びせる。

渋谷でも同じようなことがあって、このときはもみ合いになり、警察が割って入った。引き離されたとき、鈴木さんは鼻から血を出していた。

マイクで殴られたらしい。「警察がいたから、その人を逮捕してくれるかと思ったら、ティッシュをくれただけだったよ」とは、鈴木さん一流の冗談だ。

この人、つまらない冗談が好きだった。決して面白いジョークではないのだが、少し高めの声で、さも面白そうにこの人が言うと、つられて周りは笑いに包まれることが多かった。